

NO.1959.11.22

連絡先
松山市持田町
教育会館内
川又美子



「ああ、すべての
心が抱き合う時よ
こい、ランボー」

学習の経過報告

第四章

日本資本主義の確立

記録者

川本健三

第三章「自由民権と天皇制」を終え、第四章「日本資本主義の確立」に入りました。この章のテューターは篠崎先生、進行係は私が受持ちます。本章に至つて聖清知識が益々必要になるようですが、よく考え、而も大綱を見失わないで、学習を進めたいと思います。

(一) 十月五日から「ヤー節」に入る予定でしたが、その前夜安保系約改定についての社自両党の討論会が県民館で開か

れ、それに行つた人達があつて定刻前から話がハズンでいたので特に今夜の学習は「安保改定の問題点」について、篠崎先生のお話をきき、皆で話し合ひをすることにしました。以下はその要旨です。

「この問題を現在の時点に立つて判断しようとしても真の意味は判らない。終戦以後の歴史と深いつながりがあること。國運の結成は、再度戦争が起らないようファッシズムに反対し、後進國の民族主権を尊重し、二大陣営の平和共存を念願して行われた。

日本國憲法は、この國運憲章を根としてゐる。自衛のための戦争すらも放棄してその安全を世界の理想——國運憲章に委ねてゐる。ところがその後國運がアメリカの道具になり、トルーマンの封じ込め政策——冷戦——日本に対する再武装の再求——労働運動の弾圧——朝鮮戦争——片面講和、安保系約、軍事プロソク、警察予備隊、保安隊、自衛隊——再軍備の強化となつた。

この経過から見ると、復活した日本独占資本を背景として「日米新時代」のかけ声の下に行われる「改定」は世界平和の流れに逆行して対等の軍事同盟に入ろうとしていること、「期限十年」が問題になつてゐるのは、この朝鮮内に、再軍備を完了して、米軍基地を

徹底し、それと引き換えに、憲法改正、徴兵制へ持ち込もうとする意図が認められること、又その期間を短縮せよという要求もあることなど説明がありました。このことを土台にして話し合い、私達の生活を守り世界の平和を確保することができるとかどうかは今後の私達国民の一人一人の努力と、世界情勢の如何にかゝっていることを確認しました。

(二) ヤー節「最初の恐慌と社会問題」

維新後僅か二十余年、日本資本主義もやつと成立し始め、帝國議會も開かれた。一八九〇年にはやくもや一回の恐慌におそわれた事、これは原始的蓄積の強行不肉奇産業突進、農民の没落、労働条件の劣悪さなどから生ずる矛盾が、凶作や貿易事情とカラミ合った為であること。これを契機として小地主と主とする地方産業ブルジョアジーと非特権ブルジョアジーがその性格を明らかにして、貧小農と都市労働者との階級が天皇制と対立する時代に入った事、これらがこの節の重点でありました。

(三) ヤー節「条約改正と日清戦争」

この節は大へん難しいと感じます、二回にわけて読みました。ヤー議會における政党と政府との対立も土佐派の裏切りによつて妥協が行われ「日本憲政史の

最も不吉な前兆」といわれ、民衆と政府との抗争はつづき遂には民衆の完敗に終わったこと、明治初年以降つゞけられた「条約改正」は労働者を犠牲にし、國家の地位向上を放棄し、他國を圧迫することによつて実現したこと、このことと日清戦争との結びつき、日清戦争の要因の分析。これらが主な内容です。

なお、この節の話し合いの及かで、私達の中國に關する知識がいかに不足しているかを、今更のよりに反省させられ、中國に背を向けていることには「日本の悲劇」であることを痛感したのであります。

(四) ヤー節「株 制工業の突進」

この節では日清戦争後の國民は、戦争の負担の上に更に一層の重荷を「臥薪嘗胆」のスローガンと共になわされ、特に工場労働者に対する残酷さあまりない掠取が行われ、官営軍需工業や巨大資本を先頭にして産業革命が完了したこと、これらのことがくわしい統計表や、実例でわかりやすく示されています。

女子労働者の状態、幼工の労働、この時代に十六七才であったと想像される九州の一毛選が、その喉鉢山で四つばいになつて働いたという実話など、強く記憶に残ることでした。

— れんごい —

自己紹介

「武智祐治日記抄」

武智 祐治

私が松川先生に紹介されて女性史サークルにはじめて顔を出したのは一九五二年一月二一日（月）と日記帳は記しております。大学の一年生の時です。それ以来女性史サークルは私の生活の一つの支えでありました。サークルに参加しておられる「眩場」の先輩諸氏の勉強ぶりにはたゞ／＼感心ばかりしております。

(4) 一九五〇年三月（高茨小学校六年）

作文「ある日のおふろ」より

（前略）なんときれいな星だろうとぼくはつぶやきました。また日本は完全な独立国家ではないのだ。こりいり小さなことながらも一つ一つよくしてりっばなくににしていかなければならぬと思います。また日本の国を平和で民主的なりっばな国にするのは僕たちです。僕たちがわるければ日本の国もわるくなってしまうのです。

こりいりことを頭にいれていつそ勉強にいざしもうじやありませんか。もう六年も最後です中学校にいつても同じ考えをもっと大きな目をひろげ世界全体をみわたし一日一日を反省して一日一日りっばなくらしにつくりあげましょう。

（クラス文集「若竹」三号にのせたもの）

(4) 一九五一年三月（附属中学校一年）

作文「瞬間」より

（前略）……電車は出た!! 子供の泣き声はまだ聞える。電車は走る。しだいに子供の声は、聞えなくなる。そのその声が身にしみこんでくる。胸がせまる思いがする。こんな時の母も子供も不幸ではなからうか。電車にものせてやることでさぬ気持、電車にもものることの出来ない子供の気持、おそろく自分達で想像がつく。しかしそれ以上に親子は苦しかったのではなからうか? 「金」「金」幸福、不幸、この世の中、僕の心は思案にくれていった。不幸 幸福、僕らは幸福だ!!

（クラス文集「若竹」四号にのせたもの）

(4) 一九五四年一月二二日（金）晴たれ、曇りたり

（松山北高等学校一年）

最近の新聞紙上も相変らずくだらぬ話だけが出てい

る。知事選挙を官選にするとかもその一つだろうが、もつてのほかだ。理由のよしあし、その方法についてくわしくは読んでいないが、とにかく知事選挙を官選にするると云う事など明らかに逆コースである。

その他保安隊にしても、今日のような武器を持っていても軍隊でないと言ふ。さらには憲法改正にまでおよぼうとしている。これではわれわれ日本国民、青年は、これをだまされて見ているのだろうか。僕は絶対再軍備反対である。武力を持つことは、他に対しても自分に対しても「戦争」と云うことを表現する最も偉大なしるし物けんである。自分を守るための軍備とはだれもが云う事ではあるが、これは今日の保安隊で十分だ。多すぎるくらいだ。たゞ空軍を少し持たばいい。しかし、自分は、だんことして反対する。再軍備に、保安隊も陸はいいない。解散してもいい。だれが今の保安隊の実相を知ったら軍隊と呼ばない者があろうか。それにまだ保安隊は増強すると云う。それでいて軍隊でない憲法に違反でないと言ふ。どうしてこのやうなことがいえるのだろうか。いやしくも一國の國を代表する吉田がこれを云う。國民の生活をオニ的に考えているやうだ。もつと社会保障でもテッテイすべきだ。英國のやうに。もう吉田内閣は日本國

の行政をつかさどるものとしての資格はゼロである。自由党内閣はひつこむべきである。近ごろ自分は社会主義的な民主的な社会の方が今日の資本主義的封建的社会よりもずっといいやうに思ひだした。しかしこの内閣はもつと研究しなければならぬ問題である。

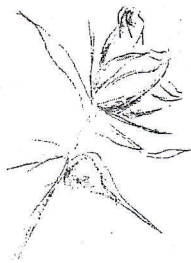
(二) 一九五五年一月七日(金)晴 (松山北高三年)

父が防衛大学へ行けと云い出したりした。二、ならば学資の争も就職の争も心配しなくていいから。それに近い内に戦争の起る心配はないとかで。僕も一応は考えてみたが、やはり普通大学へ行きたい。

× × ×
予定されました字数に達しましたのでこのあたりでやめておきます。自己紹介の一端にでもなれば幸いです。思いません。

(4)

自己紹介



工水戸 富士子

一九三三年三人姉妹の長女にうまれました。

家は徳川の末期以来の商家で屋号を江戸屋といひます。祖父母、叔父、両親にかこまれて大きくなりました。

女学校一年のときに八月一五日を迎えました。以後何年か猫の目のように変る制度の中でもまれて、自分自身で考えて道を切り拓いてきたように思います。そのころ昨日まで戦争をたゞえていた先生方が沈黙したなかで、最初にしかもたゞ一人太平洋戦争は侵略戦争であることを教え、一年あとでは、「延安」に蒋介石の政府とは別の政府があることを教えて東洋史の最後の結びとした先生がありました。

私は彼から正義を愛し社会に貢献することの大切なことを学びました。(政府が日教組を抑えようとする筈です。)以後何年かいろいろのことがありましたが、結局私の生きていく方向はこの時代に大きくまわってしまいました。或時期、特定の事柄等については随分向違ったこともしましたが、全体として今まで進んできた方向は間違っていないし、これからもそのように進みたいと思っております。

アチブルの家庭に育ち、古いカスもたくさん身につけており、それが克服し切れずに矛盾だらけのこととするのも多いですがみなさんの御批判を得て成長したいと思っております。ヘンなことをやっていると思ったらお尻をひっぱたいて下さい。

現在勤務先は労働省婦人少年室、女ばかり四人の個所

です。特殊な務め先なので孤立感に落ち入ることがありますがちなののが悩みの種です。その意味で女性史サークルに期待するところ大です。

家族はいま両親と三人。妹が一人は結婚して名古屋に一人は京都の大学にいつています。学校は栗原さんや川又さんと同級、白石さんの下級でした。友人はたいへん多くて日本各地に点在するのみならず最近の朝日新聞で知ったのですが、一人モスクワにいます。私もいつか海外に行ってみたいと思っております。今一番いきたい国は中国。目下独身です。なるべく早く結婚したいと思っておりますが、むつかしいです。

趣味といつては別にありません。音楽、映画、演劇、絵画何でも一応みますが、特にどれがよいといえるところまでいきません。おいしいものは何でも好きです。

(5)

革命も恋も 実はこの世の中で

もつとも 良くもおいしいものだから

おとな達は 意地わるく

わたし達に 青いぶどうだと

うそついで 教えていたのに

ちがいない

思うこと

x x x x x x x x x x

立花 憲美子

ゆたかな毎日を送りたいといつもいつも思う。物質的にも精神的にも。どうしてこんな面白くないのだろう。

出勤したとたん顔が痛くなる。まだ昨日のさたない空気が品物の上にケースの上にある。ほこりをはたきで舞い上げせる。そして一日が始まるのだ。

お客さんの云う争はずべて正しい、口返争は絶対にすべからず。自分の威厳を保つために下の者を権力でおさえつける争しか知らない主任。こんな中にあつてせめて友達同志でも話し合っマウツプンを晴らす争が出来るとのならまだしも、それも相手を見ながらでないと容易に出来ない。又本当にわかつてくれる人は少ない。

人が少くて忙しく気がいらくくしていて腹がたちやるい。そして友達同志でケンカをし

たりする。うらみ合います。人が少ない為なのだ。会社に対して腹をたてない。もう少し人向らしい気持ちで争をする権利があるという争を皆が自覚しなければならぬのだ。

いやな一日も閉店のベルが鳴ると、いやその三十分位前からぼつ／＼元気が出て来る。一日中モグラの様にぎたない空気の中にいて今日は晴れていたのか、いつから雨が降りだしたのか全然わからない。外に出てみてびっくりするのだ。早く日の高いうちに帰りたい。

夕方の空を見てみたい。一秒／＼変わる夕焼の雲の色を銀色にかざやく山並を。

ソ連ではもう五年後に週二日休みで週三十五時間労働になるそうだ。そうしたら日の高いうちに家に帰れる。そして思う存分野原を歩き廻る争もかわい、野菊をつむ争も出来る。

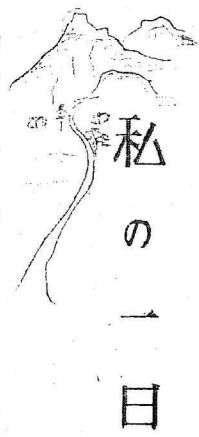
早くそんなになつたらいいなあ。

一生懸命働いてそしてどんどん豊になつて楽しいくらいが出来ると。早くそんな世の中になりたい。

こんな争を考えていると胸がふくらんでくるのだ。

キ





私の一日

永井孝子

「ヨイシヨ」ヨイシヨ」かけ声と共に歩調を合わせながら一歩一歩私達数人はファイトをもやしてある目的地に何って前進している。目的地、それは若人のあこがれ……山。そうです。山です。山頂をのぞいて若さをたずねにしてあとあとに運って前進している。その姿は誠にはつらつとした若者の姿を彫刻のようになりきりしている。「さあ目的地だ」と誰かさんがさげけんだ時、私達は何か別の世界に行ったような征服感を覚えた。そして何とも云い表わしようもない雄大な気持が胸いっぱいになりあふれた。マッホー、マッホーと一声二声が谷間にこだまして、マッホーと帰ってくる。

「タカちゃん」「タカちゃん」の声に私はハッと目が覚めた。そうだ、いそがなくなるととびおきたが「ぞうだ今日は定休日だ」と神聖に命じるとまた一ねいり、充分すいみんをとって再び目をあけた。

あーこれからまだ自分の日課が始まるのかと希望にあふれたり、反対に落胆(へ?)したりしながら立ち上った。

時に自然美に心を奪われやすい私にはたまの休日にと家にとじこもって無意識に時を過ごすのがおしくて仕方がないのです。それに天候にめぐまれていると尚更のことです。そうかといつて気の合った、友々を持たない私は自然に孤独になり、何事も一人で計画を立て一人で実行にのりだすしまつです。へといましても時と場合にもよりますが、何の変化もないまゝの人生。それ自身が幸福といえるのかも知れないのですが……世の中はまゝにならぬもの「智に仿けば角が立つ、情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」と全く身動き一つ出来ない有様です。私達のような「暇人」にでもこういうことが痛切に感じられます。——といろくつまらない愚痴をこぼしつゝもはや一日がくれようとしています。若者達はさささと今日も、いつものところいつものようにと歌の文句ではありませんが、出張に出かけます。とりのこと、私達は誰か誘惑にまてくれなにかなあ……と溜息をついている。

そんな自分に今更のように同情し一つ涙の決が頬を伝わるのも秋のせいでしょうか。夜もだんくと更け、また明日が私達を待っています。

僕の日記

後藤輝磨

〇月×日

初きながら考えた。みんな楽しく働いてるんだろうか。金のために働いているのか。僕はどうか。たゞそれだけだ。少しでも高い方がいゝ。明日は何を食いにしようか。

昼飯の時他の親父が云った。「あんたにいつつも来ていた雑誌は共産党の本ケ。ありやあ支那からくるんけ」。それからあんた共産党員かという様な質問をした。共産党とは何だと聞いてやりたかった。馬鹿野郎。

ソヴィエトの話にならば、生活が全部保障されて私有財産を認めぬのだったら衆しみが無いじゃあないか。そして「わしだつたら儲けた金はみな宝石みたいなものを買集める」と云って一人でいゝ事をした様な気になつていた。いろんな質問に答えられる所だけ答えておいたが、財産をふやす欲がないなら何も衆しみが無いと云つたので、もう説明する勇氣がなくなつた。

あとで気がついたんだが「発展」という言葉を思い出した。

×月〇日

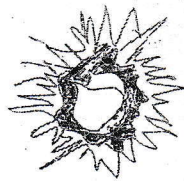
Yさんが正しい事が正しい事として認められない世の中にもものすごい勢いで抗議して来た。今の世の中には正しい事が正しい事として認められない事が何と多い事か。いや昔も今以上に多かつたかも知れない。そんな事を一つくく気にしていたら僕は生きていけなくなるかも知れない。いやそんな弱虫じゃあないぞ。

寛容という言葉は何と美しく又いゝかげんな言葉だろうか。僕は嫌いだ。しかし僕の知らない向にそうなつていく。それは今までの流れというものがあり、なりゆきでさうしたのだという事を認めてこそ僕はどうすればいいんだらうと思う。

それについていくら理論をつけても事実には変りがない。問題はこれを正しい軌道にのせる事にある。

Yさんはいきなり立った。僕もそうすべきだったかも知れない。それが若さというものか。

僕はそこで「社会に住む一人の個人」という壁につき当った。



文化の日

合田鈴子

しづかなしづかな里の秋
おせどに木の葉の落ちる夜は
あゝ母さんとたゞ二人
栗の実煮ますいろいろはた

明るい明るい月の夜
なまなまき夜鴨の渡る夜は
あゝ父さんのあの笑顔
栗の実たべては思いたす

さよならさようならやしの島
お船にゆられてかえられる
あゝ父さんよごぶじでと
今夜も母さんと祈ります

ほとんどの家ではもう夕食も終つて楽しいおしゃべり
でもはじまつている頃、帰りのみちくで考えた晩のお
菜を手際よく(へま)こしらえてマツと夕食になるのは、

私たちの家では大まかい八時頃である。そんなおそい夕食
を終えた頃、ラジオから流れてきたもの哀しいメロデー
それにさざめいてか、ふっと今日の哀しい光景が浮かん
でくる。

店ではしじゅう見かける光景だけれども、それが小さ
い子供をおぶつた女の人であったり、子供であったりす
ると、しばらくはそれを忘れかねて胸が痛いような気が
する。

あの子は何を盗んだのだろう……小ざい消しゴム
かそれともブローチなんだろうが、それともノートなん
だろうか、恐しい小父さんにつれて行かれる女の子の後
から、悲しいような真剣な顔で羨らしい小学生がついて
行く。「文化の日」で学校もお休みだし、三越へ行つて
みようと姉弟二人で出て来たものであろうに……。

そして帰りの電車の中で見たあの男の子、電車のゴ
マカシをみつけれられていたあの子、車掌の叱る声にふり
かえつた時、男の子の掌の上にのつてた十円銅貨のにぶ
い色がわびしく目に映つた。

その二つの光景が「里の秋」のメロデーに重なつて浮
かんできて急に涙がにじんできくる。
「あんた甘いメロデーに又センチになつてる」と思われ
るのも口惜しいので「今日ちよ」と店で徹夜二つがあつ

だの思いだしたら涙が出た。少しの間だけ泣かした
てにや／＼しながら夫が「泣けや」という。気恥すか
しい心もちだけれど、こらえきれないで泣いてしまった。
しばらくの間、理由を知らぬ夫は「また目がはれるよ」
と云い「こゝを片づけといてからにしたら……」等云い
ながら、私のうつ伏しているテーブルのお茶碗やお皿を
片付けてくれる。

十一月三日文化の日、功成り名遂げた明治生まれの人
の座談会では「欲をいへば戦争に負けなければよかった
が、今日では日本も良くなって今迄生きていて幸福だっ
た」と語り合う放送があり、同じ日、日本のどこかのデ
パートで万引きした子供がおり、電車をゴマカシた子
供が叱られている。

こんな悲しいとき、思いっきり泣いてみるよりほかに
どうしようもないではないか、私には……。

私の半日

篠崎 勝

十一月八日(日曜)快晴。ひろから御幸寺山にのぼる。
豊子と二人で、自転車と教育学部にあずけ、祝谷の方へ
歩く。天然記念物になっている天神松のまえから山道に

かゝる。一〇分のぼって見はらしのよい岩壁の前へ出る。
そこで七分休む。また一〇分歩いて頂上にたどりつく。
石鎚山の遙拝所になっている大岩のそばで休む。

田舎の丸蓋石油に大きなタンカーが入っているのが
よく見える。附小学校のマイクがよく聞える。弁当を
たべる場所をどこにするか、相談する。とにかく、いち
ど山を下りて自転車にのって、道後の山あたりで食べる
ことにきまる。

教育学部はちやうど学生寮をやっている。振業科の会
場で、量子がケチマップ三五円、甘酒五〇円と買う。新
聞や問題になった松山の中学校を使っている職業科副読
本はこれです。と係の学生が観らん君に呼びかけている。
歴史学研究会の会場をみる。文部省の社会科学習指導
要領の批判を壁面いっぱいにかかげている。

自転車と道後の裏山の。たこ池。にゆく。子供が魚を
釣っている。すゝきの手で弁当をひろく、目へあさう
のズック靴をかりてはいてきたのが足に合わないのどろ
だん着物と草履でめつたに靴さばか反りで反れないせい
か、一時向ばかりの山のぼり、もう足がいたくて歩け
ない。

これでは、女性史サークルでくゞ嶺へものぼるとき
には、はき直れた草履でゆかねばなるまいと思う。

十一月八日 はれ

工水戸 富士子

九時半起床。カーテンをあけると、快晴の窓からまばゆい太陽の光が入ってくる。隣のパチンコ屋の球を流す音がやかましい。服に着かえて、昨夜よみかけたままにしてしまった新聞などちらばった部屋をそのまゝにして階段をおりて居間へ。母は数日来の神経痛で相変らず寝ている。容態をきく。昨夜も眠れなかったとのこと。

雑談をしている向に店に未客。空気入れを貸せと中学生二人連れ。互いので断る。

向いの食堂で電話を借りにきた。父が荷売用の鉛をとかすといので石油コシロに火をつけてやる。それから思ひだして鏡を流す。封筒を探して二階にもってあがる。ラジオをきながら鏡台に座りカミをとく。

フトンをはいて部屋を片づけ、昨夜かいた手紙二通封筒に入れ、宛名書き。昼の食事をやるべく階下におりると、京都の友人より手紙。墓参りで岡山に旅し大塚によったとい。てゼン又らしい静物の絵はかきが入っていた。結婚以来四年、ずつと病の床にあつて一進一退の病状をつづけていく友の身の上をはるかに思う。早く元氣

になつてほしい。

食事はハムをい入固くなったチーズを卸してスバゲツテイのケチャップいたため、食事をしたのは一時すぎ。

母は昨日から通いはじめた指圧がきいたらしく、今日は食争におきられるようになった。食後母の寝床にもぐりこんでウトウトする。お客で起され糸を10子うる。値段はいつものことながら家族にきかないと判らぬ。

次に祭礼用の幕につるす房を一本売る。梅の形に縮んであがる。三時に母が指圧師のところに行くといので着物をだしてマリ店番を父と交替。二階の自分の部屋へ行って干したフトン片づけスクラップブックの整理をする。途中全国税の宣伝カーが民族独立行動隊の歌を前ぶれにして街頭宣伝である。今度の事件で解雇された友人の二とを思ひだしながら飛びだしていつて手をふる。五時前に夕食の買物に外出。主婦の店で肉カンヅメその他をかう。名古屋に嫁いでいる妹の所に送る分も含めて五九二円。

帰りに郵便局によつて手紙二通投函。

夜テレビで「光子の窓」をみながら親子三人で夕食をすませる。あと、母の見舞にもらったケーキをたべる。

テレビでNHKのニュースをみる。福岡大牟田の炭鉱の争議の様子がつる。労働者に合理化反対の争いは非常

に困難であろう。心からの声援を送りたい。ストに反対して店をしのめている商店街をみて複雑な気持ちになる。

九時まで食事の片づけ、妹に送る小包作成その他雑用を片づける。九時から三十分間テレビの推理番組「私だけが知っている」をみる。ドラマをみてレギュラーの探偵が犯人を推理しそのあと真犯人の名が出るのである。私も好きでいろいろと犯人を当てるべく考え、たまには正解をだすこともあるが今日は当らなかつた。

のち母と風呂へ。彼女は十日ぶりの風呂でたいそう喜んでた。早く浴つてほしい。十時から十二時まで、むごくにのせるべく自己紹介を苦心して書く。なかく裸になりきれなくてよいものができない。結局一番大切な問題は半分逃けた形になった。不本意ながら現状だから仕方ないと考え、あきらめた。

ある透明な秋の夜に

高岡夏江

生活のなかにボエジーを……。そういつて私から去っていった初恋の人を、いましみくと憶つてみる。

京都大学の学生であった彼は、まれにみる透徹した理

性と、徹底した合理主義の持主で、つね々、近代人は意識の過剰の節約をせよともいつていた。

その半面、少年時代に萩原朔太郎の影響をうけ、詩人であつた彼は、生活のペーソスをも愛し、僕の場台詩が生れてくるような生活はノーマルなものではないといつても、おさえてもおさえなくても生れる詩情を、一方では酒にひたりながら、筆にたくしてわたしの許へしは、送つてきたが、詩は難解でニヒリスチックで、その左のものの哀しい気分にはきこまれるだけであつた。

しかし彼のもつ近代精神が、潔癖と自尊心に満ち、青春の憂愁をた、えた生活感情をふくめて、胸に痛く理解できろ今、わたしは永遠に彼との交情を失なつていふ。そのよつてきたる原因は、すべてに幼なかつたわたしにあり、或る年の秋、京都のインク・ラインのほとりを小西にぬれながら、二人で声もなく歩いたのが最後の別れとなつた。

日頃はすっかり忘却の彼方にあるこのことを、ふと憶いだしこう書いてくると、あれから幾たびかめぐってきた秋の夜の感傷にすっかりおぼれているようであるが今のわたしは、センチメンタリズムやロマン性等は何かの役にもたないし、大して価値のない人間の情感だと思つていふ。むしろ整理すべきその俗臭に顔をそむけてい

るといつていゝ。

人々は、時に男性はわたしたちに女であることの條件として、この情感を時に求めほしないうか。もしやうだとしたらそれは觀念の遊びを要求することであり、合理的近代精神を疑うほかない。

それにくらべ周囲の現象はいくらきびしくても、またなくとも、ポエジーは一貫して流れている。なぜなら生活それ自体がポエジーなのだから……。生活のなかに自分自身を持ち充分な理性の上に生活の裏付を把握したわたしたちの一日一日は美しいポエジーにあふれている。

わたしたちは無意味に生活に流されてはいけない。もちろんわたしたちの生活は依然としてまじく忙しいけれどわたしは見る、一日の仕事を終えて、暗い日々を迎えぬために、学習サークルに集まってくるオフィス・ガールや大学生の討論の輪のなかに、秋の斜陽を一ぱい浴びまとり入れに立ち初く農婦の後姿のなかに、更には又、機械に青春をかける女工さんや、つるはしを振り上げるたくましい労働者の真剣なまなざしのなかに本当の詩を、賑々と流れるポエジーを。

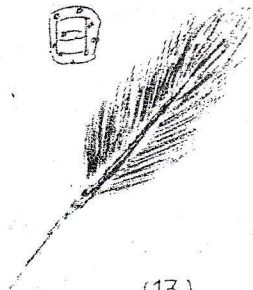
そしてこの世の人間という人間が、いとしくまわたくましく二み上げてくる暖いものをおさえきれない。わたししが人一倍、人間関係を大切にしたいと欲するのをも

そんなところから一ているのだが、これは相手のあることで、その相手の出方次第でコッソリと抵抗を感じたり、コンチキショウと思ったりするのが人間の出来ていない証で残念であるが止むを得ない。

紅顔徒に鏡中にたゆみの感また新なり……。わたしも人生五十年の半ば以上を過ぎた。ひとりですせはつくれない。みんなで仲よくやってみよう。

また初恋の人で恐縮だが彼も亦、大学をでた後、就転先での労働運動に、人間としての生きる道を見出している由、風の便りに聞いた。

アンボの一日



(13)

大山 初子

話はちよつと古くなるが、私の一日を、先月二十日の安保条約改定阻止オセ七次総一行動デーの日にとつてみる。その日午前十一時、私は田川夫人ほか数名の婦人民主クラブの人達と、理事会の決定に従い、青い羽根の募金運動を行うべく街頭に立った。

場所は大道。安保改定阻止、薬水爆禁止の青い羽

根を胸につけまじさう」の立看板を背にして、安保改定阻止県民会議の白い腕章をまき、メガホンを持った私は、最初のうちはじめめの街頭進出にいさゝか棒立ちの気味であつたが、どこかの病院の若い看護婦さんが自分の方から近寄つて来て、一枚十円の羽根を買つてくれたのが皮切りで、それに勇気を得てさう／＼往來のしげくなつた人々に呼びかけを開始した。

しかしあまり芳しくない成績に、これではいけないと猛烈とファイトが頭をもたげ、何うから来る人が前を過ぎるまで視線をはなさず、しきりに呼びかけながら手にした羽根を差し出すようにしたところ、少しは売れるやうになつた。そして私は次のようなことを発見した。

「安保改定阻止と原水爆禁止の青い羽根運動に御假力下さい」と呼びかけるより、安保をのけま「原水爆禁止の青い羽根運動に御假力下さい」と呼びかける方が得策（？）だということ。ヤ一ツだけごまに云う場合舌をかまなくていゝし……なんでもこれは冗談であるが私の見たところ安保に対する関心が人々の向にうすいのである、なかに公然と「ボクは安保改定に賛成でね」とうそぶく人もあり、さうでなくともアンボ——の呼びかけは敬遠される傾向があらわで、私達を避けてわざわざ遠廻りする人もいる、その点、原水爆禁止の呼び声

は誰の感情にも抵抗なく入つてゆくのを見てとつた。

安保に關しては岸政府のPRよりこちらのPRの方が優位を示しているという地評の人の話なのに、いま私達の前を行く群衆にそれらしき反応がないということだけは、考えてみれば空恐ろしいことで、それなら一つ原水爆禁止の呼びかけ一本でゆこうと、素早く計算にいった私の態度にも問題はあつた。

しかしゆっくり考えてみれば、原水爆禁止、核武装反対は即ち安保改定阻止の道に通ずることなので、今日のところは一枚でも多くの羽根を売ることによって、少しでも多くの阻止運動推進のための不レグ費をつくれれば、目的は同じだと懸命に呼びかけをつづけた。

杓から私達の前を通過した高知行きの急行バスには、九日間にわたつて工作をすませた松川事件の菊地被告も乗り合わせていて、窓のうち外から互いに笑顔を交換し合つたが、見れば必り胸にも真新しい青い羽根が光つていた。

さて比較的目だつた羽根を買つてくれる層は、子供ずれの中年の婦人に多く、同じ女性でも若い世代には完全に無視され「それでいゝのですか……」と啞然として後姿を見送ることもしばしばであつた。けれど午後五時から二時向ほど、労組の人に引き継いでもらった。その

日の売り上げは、市駅前と大街道の二ヶ所あわせて一万二千五百円というかなりの好成績で、従つて一千二百五十人の人々の胸に青い羽根がつけられたことに成り、私達は今日の雲一つない真澄の秋空のように晴ればれとした。しかし晴ればれといふ気持ちでいられないのが、安保改定の雲行きである。実質的には改定の話し合いをすませている岸政府は、これまで調印の時期を夏から秋へ、秋から更に私達の反対運動の盛り上りに押されて、延期を余儀なくしてきたが、その政府及び独占資本は、是が非でも今年末、おそくても来年早々には、と躍起になつてゐる。

このやうなとき、私達の陣営内でもいまだに安保をめぐる学習会をしているのを見かけるが、それでいふものだらうか……。それもその類ぶれば大抵の場合、労組の幹部であり、平和運動の斗士である。その反面、私達が今日街頭でいみじくも体験したように、一般大衆には自分達の身にふりかゝつた切迫した問題として受けとられていない。こんなことでは共に闘つてゆかねばならない。これら大衆と、一部の活動家との間の断層はますます、越えがたいものとなり、かの警転法の時のように広汎な国民運動として今後とも発展充実してゆかねばならない阻止運動の足もとをすくわれることになりはしないか……。

万が一、調印が阻止できなくても国会での批准を一蹴すればよいという意見を、ときに聞くけれども、今を去る豊臣の昔、大坂城の落城は徳川方の甘言にのせられ、外堀を埋められたことに起因した。

又現行の安保条約の生みの親であるサンフランシスコ条約にしても、あれほど全面講和を叫んだ私達の運動を尻目に一たん締結されてしまうと、後はやすくも現在まで至り、安保条約は左又行政改定などという鬼子のたぬ、相馬ヶ原やジョンソン基地の悲劇をくり返させられてゐる。

過日のエヒメ母親大会の席上、安保改定反対の一大決議が、一部の学習と研究をしてからの悠長な意見を圧倒的に退け、ほとんど満場一致で可決されたのは、生命を生み生命を育て生命を守る母親の本能から、安保改定が戦争につながる恐しい一里塚であるということを感じたからに外ならない。この母親の直感、これこそまことに鋭いものであり、千百の学習にまさるとも劣らない。

成程、理論的に「一条として米軍も日本を守るよう義務をけるとされ、然るが故に政府のいう従来の中務的なものから双務的となつて云々」と学習してから反対運動ができればそれにこした強いものはあるまい。

しかし今迄にできていなくて、現在それにとりかゝる

消息 櫛



次々と組合を脱退していった先生方の組合費が入らなれたため、財政的困難におちいった県教組に、書記局の人員整理という不幸な事態が起きてから久しくなりますが、その後どうなっているか、お友達の小川又さんや栗本さ

のにはもう遅すぎる。原水爆禁止はわかるが、安保はわからない。それでもいい。原水爆禁止をふくめて私産の安保改定反対の戦列を、一刻も早く広く統一しよう。安保に条件斗争はないのだ。私産は改定どころか廃棄の線までできれば持つていきたいのだ。

西尾未広は桐一葉のように落ちていったが——もっとも、心算詩的なものではないが——それは私産のよきう、歴史的必然性によるもので日本労働史に彼の名が登場し始めてからの言動を見てもわかるとおり、彼としては当然の馬脚をあらわしたままなのだ。

真に平和と独立を愛する私産はこの非常の秋、あくまで調印阻止のための頑張りなくしては、斗わなくては、そんなことをつづつめた表情で考えながら、つるべ落しの秋の日は西にすっかり沈んだ暮色の中を、家路さして私は急いでいた。

んもいることですし、当然私産の知りたところだ。最近小川又さん達はこの問題で忙殺されているらしくワケクルにお見えになりませんので一日県教組を訪ねしてみました。

まだ残暑がきびしかった頃問題が発注して以来、書記局の人達は夜おそくまで鳩首会議につゞく会議を重ね、その間にわれわれの生活権を保証せよとのスローガンをかゝげマ「書記の会」もつくり、執行部との話し合いもしばしば行つてきましたが、大勢のおもむくところ、整理は避けられない見通しで、現在すでに一人去つていきました。そして十二月初旬に予定されている組合大会の結果によつては、更に三四人転転、或いは離脱の運命にあり、つきやぶれぬ壁さどうすることもできないう現状です。あらしの勤評反対斗争のとき、そしてそれにつゞく一連の弾圧政策の前に組合とともにつゞく書記さん達の果した役割と苦斗を思つたとき、いくら財政難とはいえ首切りとはあまりに酷ではないでしょうか。しかし唯一の解決策は、権力に負けて組合を裏切つていった先生方が一日も早く復帰され、又もとのように否それ以上に強くなること以外にないようです。

世は安保論議に明け暮れておりますが、天下胸懐の京
洛の秋は一入と拜察致してあります

先に私どもの学習サークルへ先生の快書「日本近代史
」をお送り下さいまして誠に有難うございました。

その後私どもも、あらゆる平和と民主主義を守る運動の
戦列に参加する一方、いろいろなサークル内の欠点を充
眼しながら学習をすゝめてまいっておりますが、最近に
至つて次のような向懸点に逢着
致しました。

テヤスト合同新書5日本近代
史上巻の一三七頁の終から六行
目に始まる「これでは治外法权
回復は名ばかりで、じつは裁判
のみならず立法までも外国の支配
下に置かれることになる。」

この書は安政条約よりもはる
かに深刻に民族主権を傷つけるものであった。

しかし井上は、こうまでしても「円地開放」つまり外
外国資本を輸入したがうていた。それは井上の背後にい
る三井らの大政商が、外国資本とくんで利益をえようと
する要求にほかならなかつた。政府もこの案を承認した
の箇所でも井上改正案の背後に三井らの大政商が外国資本

とくんで利益をえようとする要求の、どのような具体的
争点があつたのであろうか、もしこれが争点とすればわ
が國の近代史上重要な争柄ではあるまいかという素朴な
る質問でございます。

次にもう一つ一五四頁の始めから四行目に「ヤニ議會
は解散された。そのあとの選挙には明治天皇が、前國の
議員をふた、び当選させるな」忠良の議員を出せと
政府にひそかに命令し、選挙干渉
資金をもあたえた」とつづいてお
ります。これも本当にあつたこと
なのでしょうか。

私どもはこれをも非常に重大なこ
とと考へます。
故に私どもの手でその史実を調
査すればよろしいのですが、適當
な文献も見つからぬまゝ、甚だ不躰
と考へます。

とは存じましたが、直接書状でもつてお伺いする次第で
ございませう。

なお私どもの機関紙一号から六号まで貧弱でござい
ますが、同時にお送り申上げますから御研究のつれん
にお目を通していただけたら幸いに存じます。

先生の御健康をお祈り申上げます。

寄 達 は が き

—— 往復書簡 ——

京都市左京区吉田本町
京都大学人文科学研究所内

井上清先生

十月二十七日

女性史サークル

御手紙拜見しました。

ちようと明日京都発で上京し、ソ連へ三ヶ月向旅行することになり寸暇もないので、折角の御質問に十分お答えできませんが、明治天皇がオニ回選挙に干渉を命じたことは「伊藤博文伝」中巻に、徳大寺待從長より博文あての手紙がありその中に書かれております。

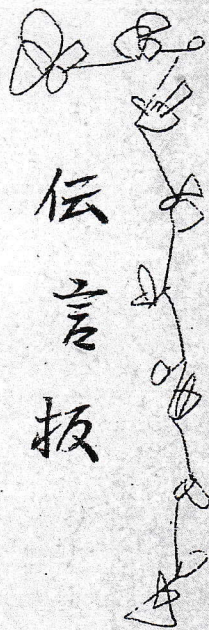
また井上外相の策約改正案の背後に三井など大政商の外資輸入の要求があるということは、かんたんにこの資料というわけにはいきませんが「歴史評論」にも三、四年前にこの点に關する研究論文がありました。

「世外井上候伝」にも若干の資料はあります。とりあえず御返事まで。

篠崎君によろしく。

十一月二日

井上 清



松川図書館とはちと大げさですが、現在私の手許に次のような松川事件に關する書籍類があります。

松川裁判——広津和郎著。松川事件判決特別号——中央公論社発行。赤岡被告の自白。太田自白とその解剖被告——佐藤一著。愛情は壁を透して——被告、家族との集簡集。とりもとした瞳（家族の斗い）——松田解子ら編。パンフ、松川シリーズ④（④外数種。残簡紙、松川通信。その他資料。

すでに今までも個人的にお貸ししてきましたが、紙上を借りて公開致しますから、松川事件の新しい段階にやなえませひ御利用下さい。

秋の夜長の読物として最適。なおこのうち「被告」はどなたにお貸ししたのか失念致しましたので、この際所在を明らかにして下さいませう。この外、松川事件のうちそとへ（広津和郎著）昨秋、最高裁で行われた口頭弁論の収録も、たやすく入手できますから附け加えておきます。

（大山）

世界の平和を

機械のなかの青春より

平和 私たちののぞむのは

世界の平和なのだ

明日は 今日ばかりはしないかと

おびえることがないように

みんなが平和について考えよう

二度と起したくない戦争

私の恋人をうばっていった戦争

反の父を母を あらゆる人々をうばった

のつうべき戦争に

私たちは大声をあげて叫ぶ

平和

平和を住みよ世界にするために

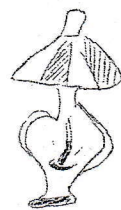
私たちは立ちあがろう

誰がなんといっただって

戦争に使う武器は作らない

作るものか

編集後記



はじめの二、三のみとして「私の一日」という、共同テーマをもうけたとこう、御覧のようにたくさん原稿があつまりました。実はこの「私の一日」は、先号でご紹介した東京の一サークルの機関誌「ひろば」から拝借したもので、いゝことはとんとりいれようの声もありほかに提案もあつたのですが、この方が親しみやすいというので決定しました。

今後も二のような企画をつづけてゆきたいと思えます。みなさんも、各人各様の生活や考え方の一断片に接していつもの学習会の話し合いとは又違った、楽しい時間を過ごされたことでしょうか。みんなが書くということが、機関誌を充実させ、楽しいものとする条件です。これを機会になるべくみんなが毎号「何か」を書くということに致しましょう。

次号はいよいよ一九五九年サヨナラ号です。どんな内容のものとするか、今からみなさんで考えておいて下さいませ。